第2回

うこん桜朗読会

「にごり江」
「一葉日記」

樋口一葉作

吉備路文学館で　春のひとときを

月日・2019年4月14日（日）

時間・午前10:30～　　午後2:00～

場所・公益財団法人　吉備路文学館

岡山市北区南方3-5-35（　086－223－7411）

入場料・一般1,000円（小中高大学生は入館料のみ）

主催・白萩の会　　写真　吉備路文学館の鬱金桜（うこんさくら）　明石館長撮影

≪連絡先≫　代表竹入光子・事務局榊原公江・大塚数馬（090－7122－7455）

物語りを書いて生計をたてようとした　近世以降初めての女性。

樋口一葉（1872～1896）明治5年東京生まれ。本名奈津。父親の死により16歳から「相続戸主（女戸主）」となり貧困の日々がはじまる。中島歌子の「萩の舎」に住込み古典や文字を学びながら、半井桃水の下宿をたずね小説を学ぶ。その道中に「雪の日」「闇桜」等構想する。しかし桃水との仲を噂され、桃水と別離後に書いた「うもれ木」が評判になるが、傷心の一葉（21歳）は吉原に近い下谷龍泉寺に転居して荒物、駄菓子屋を開業。失敗を経て「大つごもり」「たけくらべ」「うつせみ」「にごりえ」「十三夜」を発表。一葉の名声は一気に高まり門下生が増えたが、肺結核の病状は絶望的に進む。「裏紫（上）」「われから」を発表したが、「裏紫（下）」は未完のまま24歳で逝去。これら不朽の名作に費やした期間は僅か1年半程といわれている。

演目　樋口一葉作

「一葉日記」　「にごりえ」

出演　白萩の会

構成・もみの志郎　　脚色 演出・たけいりひかる子　　プロデューサー・大塚数馬

竹入光子

大塚数馬

福島いつゑ

榊原公江

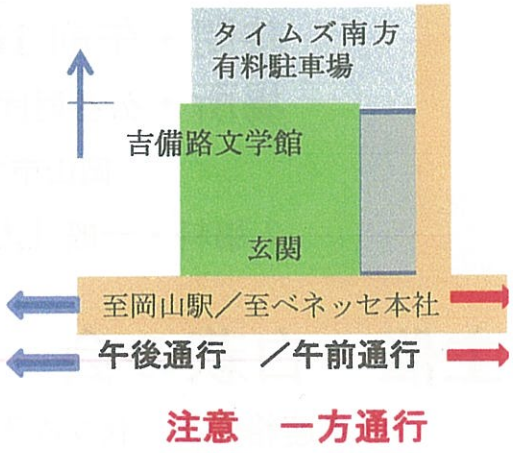
三宅和子

もみの志郎

石田節子

大西　美香

金池兼広

≪一葉日記≫近世日記文学の雄といわれる一葉が残した日記から感動的な名作が生まれた背景をたどります。吉原に近い転居先で小さな雑貨屋を営みながら遊郭に暮らす女たちに注がれる一葉のまなざしは・・・

≪にごりえ≫　居酒屋の女、お力は店では一番年若く、器量よしで気風もいい。お力に夢中になって家業を破滅させた布団屋の源七。源七の女房、お力の同輩の女おたか。明治中期、女たちのそれぞれを描いた作品で、時流をはるかに超えた不朽の名作のひとつです。